夕刊文化

近みち

森一夫 委員

閣内不一致も意に介さず延命に余念がない菅直人首相に、不安を覚えずにはいられない。「菅首相のやり方は専制政治ではないかと言う人さえいますよ」。こう語る日本記者会見で語り、あたかも政府の方針であるかのように見せるのは尋常ではない。

宮原さんは民主党のある幹部に菅首相を何とかしてくれたそうだ。

論理のすり替えだが、企業ではトップ経営者による事実上の独裁が少なくない。昔、スーパーのダイエーの創業者逆らう人はいなかった。

人事権を持つトップは一般に絶大な権力を握っている。「経営者は権力を正しく行使しなければならない」と、現中国大使の丹羽宇一郎元伊藤社長になるケースがある。

権力のうまみだけを享受して、威張ったり自分の好みで指示を出したりする。いさめるべき専務が何もセンムだと、会社は確実に活力を失う。

インターネットで購入
売サイト「日経ストア」
turei.jp/nikkei/）

7面に掲載

文学周遊 274

伊能忠敬の測量隊がたどり着いたニシベツの海岸。江戸から4百里を歩き通した＝写真　佐光恭明

井上ひさし「四千万歩の男」　北海道・別海町

どうにかして ネ子モロへ行きたい

「一身にして二生を経た」伊能忠敬が晴れて第1次測量隊を組み、ニシベツ（現在の北海道野付郡別海町）までやってきたのが寛政12年（1800年）8月7日。当初、その先の子モロ（根室）まで足を延ばす予定だった。

なぜか、測量隊はここで引き返す。著者は、西別川のサケ漁が真っ盛りで舟も人足も借りることができなかったから、という解釈を加える。

忠敬は56歳から17年間、10次にわたる測量の旅で全国を踏破した。北海道の折り返し地点である西別川河口の南岸では今、色とりどりの山野草が咲き誇り、「第一次伊能忠敬測量隊最東端到達記念柱」と刻まれた木柱が西日を浴びて長い影を作っていた。

別海は東京23区が2つほど入る広大な町だ。産業の中心は酪農。牛の数12万頭に対し、人口は1万6千人。過疎化が進むこの町には、忠敬をこよなく愛す男たちがいる。

ニシベツ伊能忠敬研究会の4人のメンバーだ。記念柱を2004年に立て、周囲の草刈りを続ける。忠敬の研究を重ね、測量隊と同じ道を地元の人と歩くイベントも催す。

忠敬は、江戸に出て第二の人生を歩む前から、米問屋の仕事の合間に、天文暦学の勉強をして地図作りの準備をしていた。研究会の初代会長、丹羽勝夫さん（66）は町議会議員の傍ら、私設の民芸館に、別海町が栄えた昭和30年代の商店などを再現してきた。

定置網サケ漁の漁師、福原義親さん（62）は、仕事の合間に開拓時代の史料を漁る。西別川の流域に木を植えたり、シマフクロウを保護したりする運動にも力を入れる。中西別中学の事務主幹、川村俊也さん（56）は、統廃合の進む小中学校の校歌や校章をCDなどに記録する。

忠敬の生き方そのものを地で行くのが現在の会長、磯田忠雄さん（58）。高校時代は野球部の投手。ハム会社（横浜市）に就職してからも野球を続けた。腰を痛め、専門学校で測量を学び、地元の別海町役場に就職。38歳で測量設計事務所を旗揚げ、今は各種地図をデジタル化し、津波の被害を予測するハザードマップなどを開発している。

4人に共通しているのは、急速に消えようとするものを後世に残そうとする意欲の強さだ。本業を引退する折り返し地点で、それぞれがどんな花を咲かせるか。楽しみだ。

（特別編集委員　足立則夫）

いのうえ・ひさし（1934～2010）　山形県生まれ。5歳で父を亡くし、仙台市の児童養護施設に預けられる。上智大学卒業後は放送作家、劇作家として活躍。1972年には小説「手鎖心中」で直木賞を受賞した。

76年オーストラリア国立大に赴任する際の飛行機の中で、飛行距離の4・5倍もの距離（35000キロ）を歩き通した忠敬の愚直さに気付き、執筆を決意した。忠敬から数えて7代目の洋画家、伊能洋さん（77）は本書の出版後、知り合いになった。

「小説では忠敬の歩幅を90センチとしているが、史料には69センチとある。執筆前にこの情報を提供していれば『五千万歩の男』となっていたかもしれません」

（作品の引用は講談社文庫）